

# 「底が突き抜けた」時代の歩き方 489

## 「働くこと」の否定的なイメージはどこからくるのか

ニートやひきこもりの登場によって、人間は必ずしも働かなくても生きてゆける成熟社会に至ったことが明白になった。彼らの存在の最大の意義は、「働くこと」の意味を根底から問いかけたことにあるといつてよい。フリーターが正社員になりたくてもなれない若者たちであるように、彼らが働きたくても働けない若者たちであったとしても、あくせく働かなくとも日々を送ることができるという、若者にとっての生活を発明したことはやはり驚きに値する。人は生きるために働く（筈であった）のに、働くために生きねばならなくなったという倒錯を、ニートやひきこもりは直射することになったのだ。生きるために働く必要がなければ、働くために生きることからも免れているからである。

彼らは働かなくても生活できている若者であるが、前述したように、その状態をけっして肯定しているわけではない。働かなくてはならないとたえず思い詰めながらも、「働くこと」に従事していないという点で、彼らは自らの沈没状態に対してむしろ否定的である。働きたくないから働かない若者たちのなかからニートやひきこもりが登場しているのではなく、働きたいのに働けない若者がニートやひきこもりのかたちをとって出現しているのを見ると、彼らにこそ「働くこと」の義務感が逆に濃密に浸透しているのが感じられる。つまり、こういうことだ。働きたくないけれども働いている若者に、「働くこと」の義務感は濃密ではない。だから、彼らはニートやひきこもりにはならない。彼らが働きたくないけれども働くのは、家族を維持するためであったり、消費生活を楽しむためであるからだ。彼らには働く目標があるので、目標達成のためには職場での嫌なことも我慢ができるのである。

しかし、家族維持や消費生活の楽しみという目標を失ったとき、いいかえると、働く目標を失ったとき、彼らは「働くこと」をやめるだろう。「働くこと」が好きではないのだから、「働くこと」それ自体の目標を見失って、「働くこと」をやめるにちがいない。いや、最後に自分が生存するためという目標が控えている。その最後の一点さえクリアできれば、われわれは「働くこと」から解放されて生存することができる。「働くこと」から解放されて生存できることは、はたして我々にとって理想的な状態なのだろうか。ここで問題になるのは、「働くこと」からの解放が一体、なにからの解放を意味しているのか、ということだ。「働くこと」からの解放が「働くこと」の喜びからの解放である筈がないから、「働くこと」の苦痛からの解放であるとして、その解放それ自体が何かの喜びへの踏み込みでなければ、「働くこと」の苦痛からの解放は喜びでもなんでもない。

人は「働くこと」からの解放を願っているのかどうかについて考えるとき、斎藤環が『働くこと』は『義務』だろうか(『ちくま』05・1)のなかで述べている、一つの提案をめぐる話し合いが次のようなところに落ちていくことは、非常に興味深く感じられる。

《私はみずからかかわっているデイケア活動の中で、ひきこもり経験者たちとさまざまなテーマについて話し合うことがあるが、ある時メンバーから面白いテーマが提案された。「もし働かずに生きていけるほどのお金があったら、何をして生活するか」というものだ。

意外にも、この問いを投げかけられたメンバーたちは、一様に黙り込んでしまった。なかなか「楽しく遊んで暮らす」というイメージが湧かないらしい。そもそも遊ぶうえにも、没頭できるだけの「遊び」が何かわからないようなのだ。結局その場の雰囲気は、なんとなく「たとえ金があっても、普段は地道に働いたほうがいいのではないか」という常識的な方向に流れていった。それが彼ら全員の結論とは限らないが、そうした意見は、おそらく平均的な日本人なら共感可能なものでもあるだろう。》

この話し合いから窺われるのは、ひきこもり経験者たちが「もし働かずに生きていけるほどのお金があった」としても、「普段は地道に働いたほうがいいのではないか」と思っていることである。働かなくてもいいことが「楽しく遊んで暮らす」というイメージに必ずしもつながるわけではないとすれば、働かないことの時間を何によって埋めたらよいかかわからないから、「普段は地道に働いたほうがいい」ということであり、そのこと以外に時間の穴を埋める方途は知らないということだ。そうであるなら、お金がたくさんあろうとなかろうと、「普段は地道に働いたほうがいい」ということになる。そうすることができなかったひきこもり経験者たちがそう言うところに、彼らが働きたくないから働かないのではなく、働きたいけれども働けない「ひきこもり経験」をしいられてきた彼らの実感が滲みでている。

このひきこもり経験者たちの思いは、おそらくニートの思いでもあるだろう。「働くこと」から解放されるためにニートやひきこもりに沈没しているのではなく、「地道に働いたほうがいい」と強く思っているのに、自分の身体はその方向に進まずに逆に向かってしまう掣れが彼らから感じられる。そしてニートやひきこもりの度合いが深まれば深まるほど、「地道に働いたほうがいい」という思いも強まっていくにちがいない。できれば働きたくないと思いながら仕方なく働いているという傾向が一方にあれば、他方に「地道に働いたほうがいい」と思っているにもかかわらず、働けないという傾向が深まっている。両極端に見えるけれども、本当はそうではない。前者のできれば働きたくないという思いは、実際に働けなからやってくるのに対して、後者の働きたいという思いは実際に働かずにやってくるからだ。つまり、働いていないから働きたいという思いが募ってくるのである。これは、結婚から遠ざかれば遠ざかるほど、結婚願望が募ってくるのに似ている。

おそらくニートやひきこもりの若者たちは、自分が本当は「働くこと」を望んでいないのを知っているのだ。「働くこと」にむかって気持ちが進まないから、身体も反応しないのだと思う。しかし、働かなくてはならないという思いはいつも「いっぱい」である。働かなくてはならないという思いと働きたくないという意思とが激しくせめぎ合い、そのことに耐えられなくなったとき、「働きたくても働けない」というフィクションのなかに逃げ込むことになるのではないだろうか。「働けない」という自分の現実を、「働きたい」という捏造した願望で相殺しているようにみえる。なぜそう考えるのかといえ、  
「働きたくても働けない」という状態よりも、「働きたくないけれども働かざるをえない」状態のほうに現実味が感じられるからだ。成熟社会になって目標のない「働くこと」のつまらなさがますます加速していることも、そのことを裏付けている。

若者たちが口にする「希望の仕事」も、自分に合った仕事を真剣に求めているというよりも、「希望の仕事」が見つかるまで就労したくないというように、彼らのモラトリアム期間を延長する口実にすらなっていると思われる。一度働いた経験から「希望の仕事」を求めてニートになるのであれば、働きたくないという意思が募ってくるのもわからぬでもない。だが、一度も働かない若者が働きたくないという意思を募らせているとすれば、それはどこからやってくるのだろうか。いうまでもなくその意思は、親が「働くこと」に対してどのような姿勢で臨んでいるか、が伝わってくるなかで醸成されていくだろう。母親のパート労働からも伝わってくるけれども、基本的には父親の就労に対する姿勢が、「働くこと」がどういうものであるのかという子どもたちのイメージ形成に大きく影響しているといえよう。一言で言えば、父親が「働くこと」に喜びを見出していたなら、子どもも「働くこと」に肯定的になるし、逆に父親が「働くこと」を嫌がっていたら、子どもも「働くこと」に否定的になるのは避けられない。

『アエラ』(04・12・20)所収の「ニート親『嘆きの壁』」で取り上げられているいくつかの事例から、その一つを拾い上げてみる。

《団塊世代は学生運動の闘士から一転、企業戦士になった。父親たちはいまでこそフリーターやニートになった子どもたちに苦悩するが、これまで育児は母親に任せきりだった。

アパレル企業に勤めるD男さん(54)も例外ではない。

「今日はクリスマス、今日は息子の誕生日だから早く帰ってきてくれるはず」

妻(52)は期待するたびに裏切られ、その度に泣いて夫を責めて大喧嘩した。新興住宅地での孤独な子育て。長男(23)が中学で不登校になった時、

「私が暗くて、夫と喧嘩ばかりしていたのが原因に違いない」

と自分を責めた。息子との息が詰まりそうな生活のなかで、眠れず、夫を布団の上から叩いた。

一方、D男さんは息子の異変にショックを受けながらも、1ヵ月で吹っ切った。

「学校だって問題だらけ。そんなところに行かなくたっていい」

かつて学外の労働組合闘争などに参加し、体制批判をしてきた団塊ならではの物分か

りの良さからか。しかし、自分は納得できても、妻はそうはいかない。家は修羅場だった。息子は振り返る。

「幼い頃、母が毎日泣いていたのを覚えている。仕事ばかりしていた父が憎く、『サラリーマンにだけはなりたくない』と思った」

定時制高校を中退後、将来に絶望して息子はひきこもった。初めて夫婦でカウンセリングに助けを求めた。1年後夫が出した結論は、「育て方が悪かったと過去を反省しても何も解決しない。親が子ども以外に楽しみを見つけ、自分の人生を生きるようにしよう」

妻は息子と顔を合わせる時間を減らすために、パートを始め、コーラスやバイオリンにも精を出すようになった。息子は、

「すごくラクになった。僕は図書館に通って、哲学などの本を濫読するようになり、そこで出会った本に『他者と出会わないと自分のことはわからない』とあった。自分の中でグルグル考えていただけではダメなんだと気付いた」

そのころ母親が見つけてきてくれたひきこもりからの脱出を支援するNPOからの働きかけに、あっという間に応じて寮に入った。今秋からは運送関係のアルバイトも始めた。NPOのフィリピン寮にいたとき、現地の女の子を好きになった。稼いだお金はすべて彼女に貢いでいる。

「貧しくても家族が助け合って日々楽しく生きている。カネがすべての日本の価値観とは正反対。できればフィリピンに移住したい」

と息子は思っている。

親として心配なのでは、と問うとD男さんはこう笑った。

「サラリーマンなんか最低です。魂を売って、カネをもらう仕事。なって欲しくない。アルバイトでも、一生懸命自分の頭で考えてやれば、働く喜びは見いだせると思う。それを見つけて欲しい。生きる希望を持ち、人のために働く姿は、数年前には考えられなかった。自力で動き始めたことは、大声を上げて叫びたいくらい嬉しい」

この事例はひきこもりになった事例であり、同時にひきこもりから抜け出せた事例である。典型的な会社人間である父親にとって、家庭生活は自分が家族を養うための給料を稼いでくるうえでの土台であり、したがって企業戦士にとっての休息場所とみなされている。育児等を含む家庭生活を破綻なく維持していくのは妻の役割とされ、家の外は夫＝父親、内は妻＝母親の分担が固定化されたために、家庭生活での夫の協力を求める母親と父親との間で諍いが絶えなかった。その歪み<sup>ひず</sup>みが母親に集中し、母子関係にまで大きく影響したとき、息子は不登校になった。この深刻な事態に、《体制批判をしてきた団塊ならではの物分かりの良さ》を持ち合わせる父親は寛大であった。責めはしなかったが、学校が嫌なら行かなくていい、で済ませようとしたのだ。つまり、なににも変わらなかった。息子が不登校になっても、父親はこれまでと変わりなく会社に行き、不登校になった息子と母親は家に閉じ込められ、ますます息が詰まりそうになった。

家の中は当然、地獄の様相を呈し、事態は悪化していった。定時制高校を中退した息子はひきこもった。家が面白くなければ、家から飛び出す選択肢もあったのに、一番嫌な家の中にひきこもるという選択をしたのである。ここで、なにも変わらない「自分にはひきこもること以外の選択肢はない」というようにして、若者がひきこもっていくことを想い起こしてほしい。「幼い頃、母が毎日泣いていたのを覚えている。仕事ばかりしていた父が憎く、『サラリーマンにだけはなりたくない』と思った」と息子が振り返ったそこに、家から飛び出せなくなっている自分を見出していたにちがいない。父親への憎悪がサラリーマンへの憎悪と直結したとき、サラリーマンにもならず、サラリーマン以外の者にもなれない将来の自分に対する絶望が湧き起こってきたとしても、別に不思議ではなかった。だから、あらゆるひきこもりが絶望のなかへのひきこもりといってよかった。

息子が不登校になっても変わらなかった父親は、息子がとうとうひきこもるという土壇場になって、ようやく腰を上げ、夫婦でカウンセリングを受けることになった。本気で変わろうとし始めたのである。「育て方が悪かったと過去を反省しても何も解決しない。親が子ども以外に楽しみを見つけ、自分の人生を生きるようにしよう」というのが、一年後に父親が出した結論だった。「親が子ども以外に楽しみを見つけ、自分の人生を生き」ようとしたことは正しかったが、子どもの「育て方が悪かった」と思っていたとすれば、それは正しくない。なぜなら、子どもの「育て方」ではなく、自分自身の「育て方」が間違っていたからだ。自分自身を育てることを放棄していたが故に、息の詰まりそうな家庭しかつくりだせず、家庭生活のつまらなさを子どもに味わわせて、絶望の淵に子どもを叩き落してしまったのである。

両親とも「自分の人生を生き」ようとして、《息子と顔を合わせる時間を減ら》したことが、息子の気持を「ラク」にし、彼もまた、「自分の人生を生き」ようと歩き始めた。やがてアルバイトに従事し、フィリピンの女の子を好きになった。彼女の存在は彼の家族関係に対する否定的なイメージを払拭してしまうほど大きく、画期的であった。「貧しくても家族が助け合って日々楽しく生きている。カネがすべての日本の価値観とは正反対」という、日本の家族関係とは正反対の家族関係に出会うことによって、彼はこれまで否定的だった結婚生活に対して肯定的なイメージを抱けるようになり、彼女との結婚に前向きになっていく。「働く」ことが結婚と結びついて、生きる目標がようやく彼の前に訪れたのである。この彼の目論見に対して、父親はどのように反応したのか。「サラリーマンなんか最低です。魂を売って、カネをもらう仕事。なって欲しくない。アルバイトでも、一生懸命自分の頭で考えてやれば、働く喜びは見いだせると思う。それを見つけて欲しい。生きる希望を持ち、人のために働く姿は、数年前には考えられなかった。自力で動き始めたことは、大声を上げて叫びたいくらい嬉しい」。これが父親の息子に対する態度であった。「変わらない」息子が変わっていくにつれて、「変わらない」父親も変わっていくことの見事な事例である。いや、逆かもしれない。「サラリー

マンなんか最低です。魂を売って、カネをもらう仕事。なって欲しくない」と口にするほど、会社人間から逸脱する変わりようを父親が示していたからこそ、「仕事ばかりしていた父が憎く、『サラリーマンにだけはなりたくない』と思っ」ていた息子も、感化され始めたと考えられる。父親が変わったから、息子も変わったのである。いや、変わらざるをえなかった。父親が変わらなければ、息子も変わらなかった（筈だ）。

斎藤環は対談（『諸君！』04・6）のなかで、親の「物分かりの良さ」の中途半端さが、子どもに対する抑圧を却って強め、子どもとの関係を悪化させると、次のように指摘する。

「親も腫れ物に触るような対応をする。ブツブツ言いながら容認するから、ひきこもりは長引くんです。フリーターの家でも、ブツブツ言いながら抱きしめているのではないのでしょうか。口では否定するくせに、生活の面倒をすべて見てあげるというダブルバインド（二重拘束）が、フリーターを動けなくしている。

ひきこもりから抜け出したケースには、二通りあります。一つは、一生ひきこもっていていい、生きていてくれるだけで OK と、親が百パーセント受け入れてくれたので安心して自立できましたという『美談』です。もう一つは、ひきこもり始めたら親が相手にしてくれなくなった、存在を無視されはじめた。だから仕様がなく働きましたというものです。どちらも親の態度が一貫しているんですね。親がどっちつかずだと、子どももどっちつかずのまま、家に釘付けになってしまいます。」

ひきこもりから抜け出すことになるどちらのケースも、引きこもりの子どもを「百パーセント受け入れ」というかたちで、あるいは、相手にしなくなるというかたちで、親が変わっていくことが前提になっている。もちろん、受け入れるにせよ、無視するにせよ、親としての覚悟が子どもを追い詰めていく抑圧を加速させずに、子どもが「ラクになる」方向に向かっていることが肝心なのである。百パーセント親になってくれるか、それとも親であることから百パーセント降りることによって、自分がひきこもっていることに、子どもがなんの意味も見出せなくなってしまうようになるのであろう。

先の『アエラ』には、《子会社社長から、平社員に降格され、1000万円を超えていた年収は、半分以下まで落ちた》、都内に単身赴任中の父親が退職後の年金ではとても返済できない自宅の住宅ローンのことなどを憂えて、子どもたちの目の前で、「父ちゃんは、病気だ。給料も減った。このままだと家売るしかない」と、「父親失格」宣言すると、《フリーターの長女が、少しずつたくましくなって（...）多くはないアルバイト料から、月に4万～5万円を家計に入れてくれるようになった》事例も、報告している。これは、父親が父親の役割から百パーセント降りる事例とみなせる。もう一つの報告は、ニートの息子に対して、「将来はどうすんだ。親はいつまでもいないんだぞ」と言い続けてきた父親が、自分たちの世代の価値観が通用しなくなりつつある現実に気づき始めて、「息子にだけ変われと言うのではなく、自分も変わらないといけないのではないか」と思うようになり、自宅近くにあるひきこもりの就労支援自助グループでボ

ランティアとして、若者に《ビジネスマナーやパソコンを教える活動に参加する》うちに、一ヵ月後にやってきた息子と笑いながら会話できる関係を取り戻せた事例である。

これは、百パーセント子どもを受け入れる父親に変わろうとした事例であろう。

これらの事例と反対方向、つまり、親が「ブツブツ言いながら抱きしめている」現状に終始するなら、ニートやひきこもりは長引くだけでなく、親からの抑圧が高まってくるとき、その抑圧を逃れようとして子どもがどのような行動に出るか、といった悲惨な事態も当然、予測される。現に、昨年の１１月２４日の未明、茨城県水戸市で起きた両親惨殺事件と、その１２時間後に同県土浦市で起きた両親、姉惨殺事件は、共にニートに近い「ひきこもりの息子」と「まじめな両親」の共通点によって、世間で注目された。

後者は、長男（２８）が土浦市立博物館副館長を勤める父親（５７）と母親（５４）生後１１ヶ月の赤ん坊を連れて里帰りしていた、東京に嫁いだ姉（３１）<sup>なし</sup>を、彼と同年齢の男性と結婚していた姉の「あなたもしっかりしなさい」と詰る言葉が引き金になって、事件が惹き起こされたと報道されている。「父親がいる限り、居場所がない、死刑になっても殺すしかない」「母と姉の殺害は父を殺すための準備だった」と供述しているという。学校の成績は普通で、中学、高校では野球部に属していた長男は、教育熱心で厳格な父親の存在をたえず脅威に感じていた。代々の地主で、祖父は土浦市長も務めた名士という家系の誇りを背負っている父親の抑圧に耐えられなくなっただけで、母親への家庭内暴力も頻発した。報道で引がかかるのは、長男が高卒で進学した専門学校を４ヶ月で自主退学した後、ひきこもりがちな息子の進路を心配した父親が就職の口を見つけたものの、徒労に終わったという点である。

父親がひとつも変わらないまま、すべてに無気力でダメな長男を無理矢理、働かそうとしていたのがそこに感じられる。悪化は一直線だった。二、三年前から本格的にひきこもり、二年前の姉の結婚式にも出席しなかった。誰も入れないように部屋の入り口に段ボールを積み上げ、この頃から父親の怒声が近所に響き渡るようになった。「夜はお父さんの声で『バカヤロー、ぶっ殺してやる！』、昼間は女性の声で『働かないなら食うな！』『世間様に恥ずかしいから外に出るな！』と怒鳴られていた。勝くんの声は聞こえなかった」という近所の住民の証言があったり、母親が息子との接点を持とうと、何回か庭で息子とキャッチボールをしている光景も目撃されている。調べのなかで、「母は殺すつもりはなかった」と話しているとされるが、<sup>ふひん</sup>けっして巻き添えではなく、殺人犯の母親として一人この世に残すことの不憫を考えて、一緒に殺す場合が多い。

父親との関係だけでも最悪だったのに、その最悪に最悪を重ねる結果となったのは、姉の存在であった。息子のダメをしかりつける一方で、短大から法政大学に途中編入した姉の頑張りによって両親は喜び、父親はしだいに息子の話題を避けて、姉や孫の話ばかりを周辺にするようになっていったという。父親が姉をほめることで、自分が暗にけなされたり、無視されることには息子も耐えられたかもしれない。だがその姉が実家に戻ってきては、一人前にやっている自分と同年齢の夫のことをちらつかせながら、忠告するこ

とには耐えられなかったと想像される。それでも姉は数日滞在すれば夫の元に帰っていく身であったから、辛抱できたかもしれないが、当日は口論をきっかけに行きつくところまで行きついてしまった。前から犯行が計画されていたのか、それとも口論によって殺意が衝動的に引きだされたのかはわからないが、惨劇は起こるべくして起こったという以外にない。

父親が意欲がなくダメだと見下していた息子は、父親がそのような視線を強めれば強めるほど、心理的に追い詰められていったと思われる。それは、犯行の朝、口論になった姉を数回殴ったことで、「姉が病院に行くと自分が警察につかまる。それは父親の思うツボだ。その前にみんな殺してしまおうと思った」と、供述していることから窺われる。この供述から、「自分が警察につかまる」ことで、厄介払いができたと喜ぶ「父親の思うツボだ」と、息子に捉えられていることがわかる。つまり、自分が家から排除されるかもしれない危機を感じ取ったとき、息子に最後に残されている術は、排除される前に排除しなければならないという、切羽詰まった思いであった。「殺される前に殺そうと思った」という説明は、居場所がないなかでの、かろうじて自分が呼吸できている最後の砦としてのひきこもり空間が奪われることの恐怖を物語っているにちがいない。

『週刊朝日』(04・12・10)には、次のような記述がみえる。

《すさまじい犯行内容とは裏腹に、捜査員も戸惑うほどの無表情さで調べに応じているという。捜査関係者が、こう明かす。

「生気が感じられないというか……。色白でひ弱な感じの外見で、問いかけに対してボソボソと答える。逮捕された夜、留置場では、宙の一点を見つめたまま、考え事でもしてるかのような様子でした」

飯嶋容疑者が自室にしていた和室には、家具といえばテレビとタンスがあるくらいで、この世代の若者には一般的な娯楽であるゲーム機やパソコン、オーディオ、ビデオデッキすらなかった。壁にはピンナップ1枚飾られておらず、整然とはしているが、生活感がまるで感じられなかったと、この捜査関係者は述懐した。

「自室で過ごすことが多かったようなのですが、いったい、こんな部屋で何をしていたのか、想像が付きません」

《飯嶋容疑者は犯行後、一睡もせずに現場で一晩を過ごし、翌日の25日午前8時半ごろ、自ら110番通報している。捜査員が駆けつけたときには自宅の庭で、ぼんやりした表情で立っていたという。顔と手についていた返り血は、きれいに洗い流されていた。》

「父がいる限り自分の居場所はないと思うようになった」息子は、父親がいなくなることによって「自分の居場所」は確保されたという思いで、自宅の庭でぼんやりと立っていたのだろうか。家族がいなくなったことによって、ひきこもる理由がなくなったことははっきりしていた。だから自分で110番通報したのだが、もちろん、この事態は彼にとって喜びでもなければ、悲しみでもなかっただろう。おそらくとことん空虚であったにちがいない。テレビとタンスしかない部屋に8年間もずっとひきこもっていた若者

の心象風景に思いを馳せると、その生活には一片の快樂も見出されず、容赦のない自己処罰にも似た自己否定的要素が充満しているのが感じられる。自分で自分を充分罰しているのに、家族はそれでも足りずに自分を罰しようとしている、という悲鳴がそこから聞こえてこないだろうか。はっきりしているのは、彼の荒廃した心的状況が一気に外界に引きずりだされたとき、むごたらしい惨事が現実のものとなったということだ。惨事はすでに彼のなかで進行していただろうから。

もう一つの水戸での両親惨殺事件は、19歳の少年が鉄アレイで原形をとどめないほどに殴り殺した惨劇であった。中学校で社会科を教えている父親（51）と、元小学校教諭の母親（48）、母方の祖父とひきこもりがちの妹の5人暮らしで、二人の姉は東京の有名大学に通っていた。父親は進路指導主事や剣道部副顧問を担当しており、仕事熱心の評判だった。少年は市内の公立中学を卒業後、地元の中堅私立高校の進学コースに進むが、在学中に体調を崩して2年生時に30日、3年生時に50日ほど休んだ。高校卒業後、コンピュータ関係の専門学校に合格したものの、入学もせず、自宅にひきこもりがちになった。ここまでは子どものひきこもり家庭によくみられる典型的なもので、そこに特異性は感じられない。

問題は、ひきこもりがちの息子と娘の身を案じて（と思われるが）、近所で「面倒見がよい」と評判の母親が二年前の3月に小学校を退職したときから起こったと推測される。自分の人生を生きるために退職したのではなく、おそらく共稼ぎによる子育ての手抜きを反省したのか、子どもたちのために退職したようにみえるからだ。「辞めるときは『これからは子供に寄り添ってやっていく』『新しい人生を歩いていくつもり』と話していました。お子さんの引きこもりについても以前から聞いていました。でも深く悩んでいる様子は見せず『なかなか外に行けないけど、理解したいんだ』と、ざっくばらんに話していました」と、元同僚の話にもあるように、母親は早速息子と娘を連れて、ニュージーランド移住を決め、現地で日本人留学生を支援する会社を立ち上げるほど、力を注いだ。仕事は順調だったようだが、三ヶ月ほどのニュージーランド生活に終わり、肝心の子どもたちにはあまり効果がなかったという。

動機について少年は、「両親から『習いごとをしろ』と言われ、祖父からも『何をやっているんだ』と責められたので、皆殺しにしてやろうと思った」が、「両親を殺してやる気が失せた」などと供述しているという。土浦の事件でも「変わらない親」は明瞭であったが、この水戸の事件でも「変わらない親」は明瞭であった。前者は嫁いだ姉の存在が最悪の事態に大きな影響を与えていたが、後者では祖父の存在と「子どものために人生を生き直そうとする」母親の誤った行動力が、最悪の事態へと急がせたといえる。ここでも中途半端な「物分かりのよさ」がもたらす逆効果がみられる。子どものひきこもりを直すためにニュージーランドに移住したのであれば、その効果があらわれるまで日本に帰ってくるべきではなかった。ところが、三ヶ月で挫折したために、なんの変化もない日本の家に帰ってくるといふ、最悪の結果になった。ひきこもりの子どもにとっ

ては、より一層絶望が深まったにすぎなかった。

百パーセント子どもを受け入れるか、もしくは百パーセント親から降りるかのどちらでしか、ひきこもりの子どもに対して親は変わらないことを前述したが、水戸の事件では「子どものために生き直そうとする」母親の行動力は、子どもが「ラクになる」余地をますます狭めていくことになり、一生自分に付きまとい離れないように感じられる母親のうっとうしさから逃れるためには、殺すしかないという思いを強めさせただけのこともしれなかった。ところで、「これから子どもに寄り添ってやっていく」ために小学校を退職した母親と比較して、仕事熱心で「毎日遅くまで仕事をし、休みの日も出てくることがあった。いつもニコニコしていて生徒には『やさしい先生』で通っていた、と勤務先の教頭が語る父親はひきこもりの息子に対して、どのように向き合っていたのだろうか。報道からはなにも伝わってこず、退職した妻にすべてを任していたような印象を受ける。つまり、逃げていたように感じられる。

皮肉なことに、父親は中学校で進路指導主事や剣道部副顧問をしていた。自分の息子がひきこもりで「進路」が真っ暗なのに、父親はよく生徒の進路指導などを引き受けられるものだ、などというつもりはない。おそらく父親もその皮肉な事態に悩んでいたにちがいない。教師としても進路指導主事としても、失格であるという思いに苛まされていたかもしれない。時にはその思いに突き動かされて、息子を前に家でも「進路指導」を行うことがあったのかもしれない。もちろん、その試みは功を奏しなかった。だから、家での「進路指導」は退職した妻に任せて、自分は中学校の「進路指導」に専念するということになったのかもしれない。ひきこもりの子どもの前で父親とはなにか、母親とはなにか、が問われていることは間違いなかったが、この事件では、教育とは何か、教師であることはなにか、「進路指導」とはなにか、といったことも問われていたように思われる。

ひきこもり家庭で問われているのは、単にひきこもっている子どもの「進路」だけではなかった。父親の「進路」も母親の「進路」も深刻に問われているにちがいはなかった。要するに、ひきこもりの子どもを中心とする家族関係そのものの「進路」が問われていたのである。子どものひきこもりは、家族関係の危機のあらわれにほかならなかった。その危機的要因に対処せずに、子どもを部屋の中から引きずり出して無理矢理にでも就労させれば、それで一件落着、で済まされる問題ではなかった。現に、そのような強硬手段でひきこもり問題が解決した試しはなかった。事態が悪化するだけであることがわかって、しだいに親は事態を静観するようになった。もちろん、強行策を断念して静観するようになったからといって、事態が好転することもなかった。ただ数少ない好転した事例からいえることは、「変わらない」子どもが変わるようになるためには、「変わらない」親こそが変わらなくてはならないということであった。つまり、家族関係が変わらなくてはならなかった。

たぶんひきこもり家庭に共通しているのは、子どもにとって面白くない家庭であり、

息が詰まる家族関係だと思われる。いまだきの家で面白い家庭がどれほど存在するのかは知らないが、大半がそれほど面白くない家庭であったとしても、そこにいくらかでも息抜きできる関係ないし空間があれば、大丈夫であった。問題は、家庭の面白さが息が詰まりそうになっていくところにあった。一昔前であれば、子どもは家から飛び出すほどの元気があった。いまはそんな元気がなくなったために、子どもは飛び出す代わりにひきこもりようになった。窒息しそうな家族関係から自分を切り離すために、狭苦しい部屋で窒息しそうなひきこもり生活を送ることになってしまったのだ。それでもそのほうが、子どもにとってはマシであったのだろう。

ひきこもりになるのではなく、ひきこもりにまで追い込まれているように子どものあり方がみえるようになるかどうか、解決の糸口だと思われる。「変わらない」親はその変わらないさにおいて、子どもをたえず追い込んでいることを知らなければならない。したがって、自分が気づかないところで親が子どもをしんどいところに追い込んでいたことに気づくことが、家族関係の好転に、延いてはひきこもりの解消に結びつくだろう。親がもうこれ以上子どもを追い込むようなことはしないこと、そして自分たちをも追い込むような悪循環を断つこと以外の親の変わり方はない。子どもの気持が「ラクになる」ことによって、親である自分たちの気持も「ラクになる」方向へと、「進路」を求めていく必要があり、そのためには百パーセント子どもを受け入れるか、百パーセント子どもを無視するかしかなく、それ以外の中途半端なやり方はすべて悪循環であった。

百パーセント子どもを受け入れることも無視することも、親としての覚悟が問われており、覚悟の深さにおいてどちらも同等であった。「変わらない」親はそれほどまでに変わらなくてはならないのである。土浦の事件も水戸の事件も、親は変わらないまま、ひきこもりの子どもだけが変わることを求めつづけた挙句の惨劇であった。つまり、ひきこもりの子どもにすべての責任を負わせていく家族関係の破綻にほかならなかった。子どもが引きこもる家庭は本当は、家族関係そのものがひきこもり状態にあったにちがいない。そう捉えるべきなのである。そして子どもがひきこもっていない家庭でも、いつでもひきこもり家庭になってしまうほど、我々の家族関係はつまらなさや空虚さから免れているわけでもないことを知るべきなのだ。

水戸の事件での親は「変わらない」ままであったことにおいて、親として失敗しただけでなく、教師としても失敗した。要するに、教師であることはなんの役にも立たなかっただけでなく、むしろひきこもりの子どもにとっては有害ですらあったと思える。子どもはいつまでも「教育」されたり、「指導」されたりすることを黙って甘受される対象ではなかったし、「教育」の本質はする側もされる側も共に変わっていくところにあるとすれば、教師であった親は少なくとも家族関係では変わらなかった。進路指導をする父親は、自分こそが「進路指導」されなくてはならない困難な場所に蹲っていたのである。

2005年7月10日記